審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名　徐 新堯

論文題目　台湾における二十世紀前半の都市改造以降の都市空間及び建築の変容に関する研究

本論文は、二十世紀前半に台湾で行われた市区改正以降の都市空間や建築の変容の実態調査を通じ、都市空間の再編成の仕組みを明らかにするとともに、市区改正によって生み出された建築が形成する町並みと市区改正との関連性を解明することを目的とするものである。

台湾における市区改正は、日本政府によって主導されたものでありながらも、その手法や結果は、日本における区画整理とは全く異なる様相を呈している。その最大の要因は、在来の都市空間を白紙にして計画されたのではなく、むしろ新たな計画を在来の都市空間に重ね合わせるようにして行われたことによる。その結果、従来の都市空間には見られない敷地の切断や変形などが随所で起きた。これらの敷地においては、その後時間の経過とともに建築も変容し、新たな建築類型を生み出しながら、都市の再編がなされることとなった。本論文では、その再編の仕組みを解明することで、都市空間の多様性や柔軟性、また都市が本来備えている自発的な調整機能、ヒーリング能力を評価しようとするものである。

そのため本論文においては、「埔里」の町を主な研究対象とし、文献調査、現地調査を通じて土地割りの変化、土地とつながる外部空間の変化、建築用途や形態の変化を調査し、そこに潜む都市再編成の仕組みを明らかにしている。

本論文は全６章で構成される。

第１章では、研究の背景および問題意識、先行研究と研究課題、また研究対象と研究方法について述べている。

第２章では、台湾における都市計画の歴程、また建築変容に関する要因（建築関連規制、建築生産、材料、構造、社会環境の変化、家族構成や生活様式の変化）について述べている。

第３章では、「埔里」の町における市区改正前後の街区の発展過程を地籍図から追い、街区における空間構造の多様性を示すと同時に、敷地レベルでの変容が都市空間再編の鍵であることを指摘している。その敷地の変容は、（a）「細長い短冊状の土地」（b）「不等辺多角形の土地」（c）「宅地化されていなかった土地」という従前の３つの土地形態と、「計画道路に面しているかいないか」という２つの要因によって、多様なタ

イプが生み出されたことを明らかにしている。さらに市区改正によって生まれた敷地タイプを「短冊状の敷地タイプ」と「非短冊状の敷地タイプ」に類型化し、建築の調整が導かれる可能性を示している。

第４章では、敷地と建築との関係を、250 にも及ぶ実例の現地調査を通じて明らかにしている。その過程で前面道路などの「外部空間条件の変化」が建築の変容にとって大きな要因になっていることを指摘し、「外部空間―敷地―建築」の関係が再構築されるパターンを以下の三つに類型化した。(1)「敷地」が継承される場合(2)「既存の建築類型」と「敷地」との関係が継承される場合(3)「敷地」と「外部空間」との関係が継承される場合。そして結果的に生み出される建築の「表層」のと町並みとの関連を確認している。

第５章では、建築の変容に対する市区改正の影響について考察を行っている。その影響は、「土地の再編成」と「外部空間条件の変化」に分類され、前者においては建築の増築のパターンを導く点に、また後者については建築の表層の調整に影響関係が顕著に現れることを確認している。

第６章では、第３章から第５章までの結果を踏まえて結論を述べるとともに、台湾における都市空間の再編成の固有性についても触れ、台湾における都市の近代化における市区改正の位置づけを明確にしている。

以上のように本論文は、もともと市区改正と区画整理によって都市の近代化が目論まれていた台湾において、歴史的偶然から区画整理のなされなかった都市に着目し、その建築的変容と市区改正が一体となってつくり出す都市の再編成の仕組みを明らかにした。

市区改正がもたらした敷地の変容と建築の変容を相互不可分な関係を持つ事象として扱う視点、また従前の都市構造を残した上でなされる都市更新に、都市の柔軟性やヒーリング能力を発見する視点は、今後の都市計画、建築計画において極めて重要な知見を与えるものであり、建築／都市計画学の発展におおいに寄与するものである。

よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。